南の光明

The Catholic Diocese of Naha Newsletter

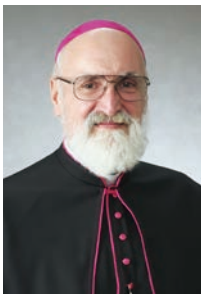
今年の教区の目標

すべての命を守るため、
キリストと共なる
平和の道を歩みましょう。

〒902-0067　那覇市安里3-7-2
カトリック那覇教区本部
TEL.098-863-2020 FAX.098-863-8474
発行人　W.F.バーント司教　1部40円
http://www.naha.catholic.jp/

(1) 2020年5月1日（毎月1日発行）　カトリック那覇教区報 MINAMI NO KŌMYŌ　第738号（5月号）

家庭祭壇で祈る



カトリック那覇教区長
ウェイン・F・バーント司教

親愛なる兄弟姉妹の皆さん、教会で皆と一緒にお祈りすることは毎週の習慣になっていたと思いますが、家で祈ることには慣れていない方も少なくないでしょう。司祭が信仰者の新しい家を祝福する際には、家庭祭壇の祝別の祈りがあります。

「いつくしみ深い御父よ、私たちは、御名を尊び、憐れみを願い、頂いた恵みに感謝するため、主日ごとに教会の祭壇の前に集まり、ミサ聖祭にあずかります。

また、日常の生活においても、主イエスは霊と真実をもって祈るように教えてくださいました。私たちの住むこの家も祈りの聖堂となりますように、その中心として小さな祭壇を備えました。

この家庭祭壇を祝福してください。この祭壇にイエスの十字架を置き、救いの恵みを思い出し、感謝をささげます。お互いの救いのために協力し、励ましあうことができますように。

また、御子が私たちに母として与えて下さったマリア様のご像を置きます。聖母マリアに信頼して、生活の中で喜びの時も、悲しみの時も、その導きと御保護をお願いします。また、亡くなった家族を思い出すために遺影や位牌を置いてその冥福を祈ります。いつくしみ深い父よ、私たちに絶えず祈る心を与えてください。この家庭祭壇が、私たちのために、豊かな恵みをいただく聖なる場所となりますように。私たち主イエス・キリストによって。アーメン。」

皆さんの家には小さい祭壇や祈る場所がありますか？わたしたち信仰者は心の平和を保つために家でも祈りのスペースを必要とします。大きな祭壇ではなく、椅子とテーブルさえあれば、それだけでも十分です。洗礼の恵みによって信仰者の心の中にはいつも共に居てくださるイエス様がおられるのですから、その祈りのスペースに身を置くことでイエス様と話し合ったり、イエス様の声を聴いたりすることができます。

イエス様の声を聴くために、聖書は大きな力となります。イエス様はみことばをとおして、私たちに話しかけます。椅子に座って聖書を読み、目を閉じて、両手をあわせて、ゆっくり息を吸ったり吐いたりすると、イエス様の語りかけを聴くことができるでしょう。たとえば、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」（ヨハネ十五・12）。

このようなみことばを目にするとき、自分に話しかけるイエス様の声が聞こえてくるのです。ミサに参加できない時も、その日の福音を読めば、同様にイエス様の声を聴くことができます。

ときどきイエス様は声ではなく、聖霊の「たまもの」を通してわたしたちに語りかけます。静かにすると、平和な気持ちになるときもあるでしょう。あるいは突然、不安や心配が消えることもあるでしょう。このようなことを心の中に感じるときイエス様はすでに話しかけておられるのです。イエス様は平和、希望、ゆるし、このようなたまものでご自分の『ちむがなさ』を私たちに伝えます。

またわたしたちにとって、家庭生活こそは、まことの家庭祭壇です。そこにまず小さな『ちむがなさ』を見つけましょう。「ありがとう」、「ごめんね」、優しさ、共感、配慮等はすべてイエス様のわざにつながっています。そして私たち自身も小さな『ちむがなさ』を家庭という祭壇でイエス様と共に捧げましょう。

新型コロナウイルス感染拡大の問題がある限り、家庭内のストレスと不安があるでしょう。しかし、信仰者が平和な心を保つことができるなら家庭全体によい影響をあたえ、皆が穏やかな日々を過ごすことができるようになると思います。聖ペトロはこういわれました。「今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され」ます（一ペトロ一・6-7）。

最後にフランシスコ教皇様の言葉を分かち合いたいと思います。祈る時、この美しい言葉を何度も味わっています。このメッセージが新型コロナウイルス感染拡大に苦しむ多くの人の心に響き、勇気となるように、まず皆さんで味わっていただけると幸いです。

川は自分の水を飲みません。
木々は自分の実を食べません。
太陽は自分自身を照らしません。
花々はその香りを自分自身に向けて流しません。
他者のために生きることが自然界の法則です。

私たちは皆、互いに助け合うために生まれてきました。
それがどんなに難しいことであっても・・・。
あなたが幸せなら、
あなたの人生はすばらしい。
しかし、あなたのおかげで
他の人々が幸せになるなら、
もっとすばらしい。

刻々と変わる葉の色は美しく刻々と変わる人生の境遇には深い意味があるということを、これらを悟るにはしっかりとした眼力が必要です。だから不平不満を言わないで、代わりに次のことを心に刻みましょう。痛みを感じることは私たちが生きている証拠です。難題に立ち向かうことは私たちが強い証拠であり、祈りをすることは私たちが一人ではない証しです！

もしこれらの真理を理解し、そして私たちの心と知恵を整えられるなら、私たちの人生はもっと意味のある、違ったものに、そしてもっと価値あるものになるでしょう！

皆さんの健康のために祈っています。神様の祝福がすべての人の上にありますように。

“Our Lady of Hope”

By: Fr. Patrick Sullivan O.F.M.Cap.

Back in the 1980’s I was serving in Honduras, in Central America. We Capuchin Franciscans (who have been serving here in the Ryukyus since 1947) had separate Missions from America, Spain and Poland, serving in Guatemala, Honduras, El Salvador, Nicaragua, Costa Rica and Panama, and we had local vocations from all those countries. So it was decided to form one united Capuchin “Vice-Province” for the whole area. As part of this process we had to choose a “Patron Saint” to name the new Vice-Province after. Since those countries were struggling with poverty, disease, oppression and much violence we chose the name “Our Lady of Hope” to symbolize our belief in the transforming power of grace.

Then, rather than choosing an existing image of Mary, a local artist painted a new image of Mary holding the infant Jesus in her arms as “Our Lady of Hope”. It was quite a different image of Mary. The artist has her and Jesus looking away, so that their faces are not visible. In Central America there are people of European white skin, native brown skin, black skin of the Africans brought as slaves years ago, and even Chinese skin of immigrant laborers from there. So the face of Our Lady of Hope could be the face of any race, and of all races.

And while many images of Mary have her dressed in beautiful robes, or even with the crown of a Queen, this artist decided to paint her dressed as a poor peasant woman, without even shoes. And while many traditional images have Mary facing us, smiling at us graciously and receiving our loving homage, this painting has Mary and Jesus looking away, looking WITH us toward the future with hope. But she looks WITH us toward a dry and difficult land ahead, with many cactus (although she has her earthen jug of water). She invites and leads us to walk WITH her and her Divine Son, to walk with difficulties but always with hope.

These days when we have so much fear and uncertainty over the new virus, wondering where and how hard it will strike, we have much need for Hope: for confidence that Jesus and Mary always walk WITH us, no matter how painful the path.

Among the many Gospel reading of this Pascal season is the story of the two disciples walking from Jerusalem toward Emmaus. They are sad and fearful and confused because of the sufferings and death of Jesus. But Jesus comes and walks WITH them (even though they are going the wrong way), and patiently listens to their sadness and doubt. And then He gently teaches them until finally they realize that HE is WITH them, and then they have joy and hope. Let’s allow Jesus and Mary to walk WITH us during this difficult time, filling us with hope and joy.

ウェイン司教からの招き

同じ時、それぞれのおかれた場で心を合わせて祈りましょう！

親愛なる那覇教区の皆様、公開典礼の中止に伴い、皆さんは共にミサを捧げることのできない寂しさを感じておられると思います。しかしながら、私たちは信仰に根ざした兄弟姉妹として、信仰者の使命を果たし続けていくために、共に集うことは叶わなくても、それぞれのおかれた場で、心を合わせて祈ることはできると思います。

そこで、信徒からの声を受け、公開ミサが再開されるまでの間、司教、司祭、聖職者、信徒の皆さんはそれぞれのおかれた場で心を合わせて同時刻の昼十二時に新型コロナウイルス感染症の一日も早い収束を願い「主の祈り」「アヴェ・マリアの祈り」「栄唱」を一回ずつ唱えることを提案いたします。同時刻に時間の都合がつかない方は、時間をずらしても構いません。共に、心を合わせて祈ることがより力強い祈りになるのだと思います。

多くの方の参加をお待ちしております。すべての人のいのちが守られ、健やかで安心できる世界を取り戻すことができるよう共に祈りましょう。

新型コロナウイルス感染症に苦しむ世界のための祈り

いつくしみ深い神よ、
新型コロナウイルスの感染拡大によって、
今、大きな困難の中にある世界を顧みて
ください。
病に苦しむ人に必要な医療が施され、
感染の終息に向けて取り組むすべての人、
医療従事者、病者に寄り添う人の健康が
守られますように。
亡くなった人が永遠のみ国に迎え入れられ、
尽きることのない安らぎに
満たされますように。
不安と混乱に直面しているすべての人に、
支援の手が差し伸べられますように。
希望の源である神よ、
わたしたちが感染拡大を防ぐための犠牲を
惜しまず、世界のすべての人と助け合って、
この危機を乗り越えることができるよう
お導きください。
わたしたちの主イエス・キリストによって。
アーメン。
希望と慰めのよりどころである聖マリア、
苦難のうちにあるわたしたちのために
お祈りください。

（日本カトリック司教協議会認可）

訃　報

◆小禄教会
マリア　上江田 清子 様
2020年4月22日帰天　享年90歳

◆首里教会
クララ　佐久本末子 様
2020年4月25日帰天　享年98歳

聖霊降臨（2020年5月31日） キリストはともに宣教する弟子たちに聖霊の派遣について話されていました。「私はあなたたちと一緒にいる間、こういうことを話した。しかし、弁護者すなわち父が私の名によっておつかわしになる聖霊が、すべてを教え、あなたたちの心に私の話したことをみな思い出させてくださるだろう」（ヨハネ14・25－26）。そして聖書はその約束された聖霊の派遣（降臨）の出来事を記しています。「五旬祭の日が来て、かれらがみな一緒に集まっていると、突然、天から激しい風が吹いてくるような音が聞こえ、彼らが座っていた家にみち、火のような舌が現れ、分かれて、おのおのの上にとどまった。すると、彼らはみな、聖霊に満たされ、霊がいわせるままに、いろいろの国の言葉で話し始めた」（使徒言行録2・1－4）。

聖霊については、処女マリアがイエスをみごもったのは聖霊によってであること（ルカ1・35）、イエスが洗礼を受けた時に聖霊がくだったこと（マルコ1・10）などからもわかるように、キリストが栄光を受ける以前に、すでにこの世に働きかけていたことがわかります。その同じ聖霊が内面に働きかけ、すべての人の救いのための業を行い、教会を発展させるために、聖霊は弟子たちとともに永遠にとどまるために、弟子たちのうえに降ったのです。これを聖霊の降臨といいます。

第二バチカン公会議の「教会の宣教活動に関する教令4」では聖霊の働きをつぎのように説明します、「聖霊降臨の日に教会は多くの人の前に公に現わされ、説教によって諸国民への福音の宣布が始められた。そして、普遍的信仰において結ばれる諸国民の一致が、新約の教会を通して予告された。この教会は、すべての国語を語り、愛をもってすべての国語を理解し、受け入れ、こうしてバベルの離散を征服する」。このことから聖霊降臨が教会活動の始まりだといわれ、特別に祝われます。またこの出来事はキリストの復活から50日目で日曜日にあたり、この日をペンテコステ（ギリシャ語で50の意）とも言います。

聖霊によって使徒たちがキリストの教えをよく悟り、力強く述べ伝え、多くの人々をキリストへの信仰に導いたように、教会はその歴史の中でこれまで、そして現在も聖霊が働かれていることを宣言し、その意義を唱え、そして聖霊による働きを求めています。

公会議公文書は次のように明言します。「聖霊はあらゆる時代に全教会を『交わりと奉仕のうちに一つにまとめ、位階制度と霊の種々のたまものとをもって教え導く』。また聖霊は、教会の諸制度の魂であるかのようにそれらを生かし、信者の心にはキリスト自身を動かした同じ宣教精神を注ぎ込む。時として聖霊は、目に見えるかたちをとって、使徒的活動に先立ち、また種々の方法によってその活動に絶えず伴い、それを導く」（宣教教令4）。聖霊の導きに信頼し、聖霊の助けを求めながら歩んで参りましょう。

ニライファ通

聖霊降臨日、ペンテコステ

クレーバー・ディ・ソーザ神父
与那原教会　主任司祭

日後の今日、不思議な出来事が起こりました。一つとなって集まっていた弟子たちの上に、聖霊（神の霊）が降ったのです。

この出来事を記念する日が、ペンテコステです。その日、突然、激しい《風》が吹いてくるような音が天から聞こえ、家中に響きわたりました。そうして、《炎のような舌》が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった、と聖書は記しています。

この炎のような、舌のような不思議なものが、聖霊が降ったことのしるしです。聖霊が降って、どうなったのでしょうか。聖霊が降った弟子たちは、さまざまな国々の言葉で話し出した、と聖書は記します。弟子たちの多くはパレスチナのガリラヤという地域の出身でしたので、そのガリラヤ地方の言葉ではない言葉を話し出した、ということになります。

「ペンテコステ」はギリシャ語で「50」を意味する言葉です。これは、ユダヤ教のお祭りである五旬祭に由来しています。過越し祭の安息日の翌日から五〇日目に行われるお祭りです。キリスト教会にとって重要であるのは、その五旬祭当日が、イエスさまの復活を記念するイースターから、ちょうど「50（ペンテコステ）」日目であるということです。イースターから五十

バベルの塔の物語～言葉の混乱

このペンテコステの場面とよく対比されるものとして、旧約聖書の創世記のバベルの塔の物語があります（創世記十一章1～9節）。バベルの塔と町の建設を、神さまが人々の言葉を混乱させることにより中止させた、という物語です。

人々は天まで届く塔のある町を建てようとしていました。その作業を中止させるために神さまが用いた手段が、人々の「言葉を混乱させる」ということでした。互いに互いの言葉が聞き分けられないようにすること。というのは、そのときまで、人々は同じ一つの言葉を話していたからです。

確かに、周囲にいる人たちが知らない言語を話し出したら、びっくりしますよね。お互い何を話しているのか分からなくなったら、意思の疎通ができず、大混乱に陥ってしまいます。「言葉が混乱する」ことによって人々の関係が引き裂かれ、町の建設は中止となりました。さらに人々が一つの場所から全地に散らされてゆくこととなりました。

ちなみに、「混乱させる」ことをヘブライ語では「バラル」といいます。ここから、この町は「バベル」と呼ばれるようになったのだ、と創世記は記します。

ペンテコステの物語～教会の誕生

このバベルの塔の物語とペンテコステの物語は、似ているようで、まことに対照的です。バベルの塔の物語では、言葉が混乱し、互いに「分からない言葉」を話し始めます。その結果、人々の関係が引き裂かれ、バラバラになってしまいました。

ペンテコステの物語では、弟子たちがさまざまな国の言葉を話し始めた点は似ていますが、集まって来た人々にとって、それらが「よく分かる言葉」であった点が異なっています。その結果、人々が一つに結び合わされてゆくということが起こってゆきました。

聖霊に満たされた弟子たちが語っていたのは、イエス・キリストがどういうお方か、ということでした。イエスさまの言葉と振る舞い、そのご生涯について、イエスさまの十字架の死について、イエスさまの復活について――。その真理に触れた人々は、深く心を打たれます。その結果、それまでバラバラになっていた人々が、一つに結び合わされてゆくということが起こってゆきました。聖霊に満たされ、イエスさまについて語る言葉が、人々を一つに結びあわせていったのです。

このようにして誕生したのが教会です。ペンテコステは教会の誕生日と言われます。

「言葉が伝わらない」という悲しみ

「言葉が混乱している」、「言葉が伝わらない」という点において、今の私たちの社会もバベルの塔の物語と似たような状況にあるかもしれません。たとえ同じ言語を話していたとしても、互いの考えや想いが伝わらない、ということがあります。すれ違いということがあります。そのことによって、さまざまな場面で対立や分裂が起こっています。

また、お互い言葉が通じ合っていたはずなのに、ある日を境に言葉が通じなくなり、想いが通じ合わなくなるということもあるでしょう。自分の言葉が伝わらない。または、相手の言っていることが分からない……。

互いに「言葉が伝わらない」というのは、私たちにとって大変辛く、悲しい経験です。大昔に書かれたバベルの塔の物語に何か切実なものを感じるのは、私たちがいまも同様の経験をしているからかもしれません。

そうしている内に、時に、互いに心が冷えていってしまうということが起こります。頑なになっていってしまう。対立した

たて軸よこ軸

大切にしているもの

コザ教会　松堂康子

それにしても泡瀬教会の旧聖堂はなんと蚊の多かったことか。聖堂の西側は木々や雑草が生い茂っているためか夜のミサにもなると藪蚊の襲撃にあう。手ではらい足をパタパタさせると、母の鋭い目でたしなめられる。聖堂では静かにしなさいということであろうが小学生の私にはたまらない。

これも小学校低学年のころのことである。やんばるの離島で転地療養していた母のもとに、毎月開南教会の布教所から「聖母の騎士」が送られてきた。イエズス様を抱いたマリア様の表紙。私は鉛筆でその上をなぞった。上手にできた。得意になった母に見せるとこっぴどく叱られた。いつもは怒ったことなどない優しい母なのに。

その落差の大きさに驚きながらも、母が教会のものを何よりも大切にしていることを知らされた。

小学生の頃、母と一緒に洗礼を受けたが確たる信仰心あってのことではない。教会に行きたくないと思うことも何度もあり、それは中年になるまで続いた。ある日母に言った。「今はお母さん、足が悪くて教会に行けないから一緒に行っているが、お母さんが亡くなったら、私、教会行かないかもしれない。」年取った母は以前のように叱責することはなかったが、すごく寂しそうに私を見つめた。

その母も昨年十月帰天した。十月五日、聖母の土曜日にマリア様に召されるように。奇しくもその前日四日はアシジの聖フランシスコ修道者の記念日であった。アシジのフランシスコ会の第三会員であった母は他の会員とともに茶色の修道服を準備していて、旅立ちの時はこの服を着けさせるようにと十年以上も前から私に遺言していた。その時は縁起でもないと怒った私も、今は迷うことなく着衣させた。聖フランシスコとマリア様に見守られた母の幸せな旅立ちだったように思う。

母は朝、食卓に着く時、お茶をついでやらないと「お前は私が死んでも、お茶ともやらないでしょう」と言うことがあった。今母の仏前にお茶を注ぎながら「ちゃんとやっているでしょう」と失笑する。生前のあの母の言葉がなければおろそかになっていたかもしれない。やって欲しいことは遠慮せずにはっきりと子や孫、周囲に言っておいた方がいい。

南の光明に寄稿するたびに母のことを書いてきたが私事で恥ずかしく、今回で終わりにしようと思う。ただ教会と言えば母を登場させたくなるほど教会と母は切り離せなかった。

母が何よりも大切にしていたもの「教会」「信仰」。

病で母が教会に行けなくなった頃より私は毎朝のミサにも与るようになった。そしてそれは今も続いている。「お母さんが亡くなったら教会に行かないかも」と言い放った私だのに・・・・神様は私を不思議な力で繋ぎ止めてくれた。朝のミサに与るとその日一日が平安で不思議な喜びに満たされる。

母の大切にしていたものを受け継いでいこうという義務感ではなく、母からの大きな精神的遺産に浴したいと思っている。

そして六十年もの歳月、信者でありながら未だに信者として未熟な私を、憐れみの心を持って教会に繋ぎ止め、見守ってくださる神様への感謝の念は尽きない。

まま、断絶したまま、動けなくなってしまうことが起こってゆきます。

愛に根ざした言葉を発し続けてゆく務め

聖霊なる主は、そのような私たちのために、共に働いてくださるお方です。私たちがバラバラになったままでいるのではなく、再び一つに結び合わされてゆくために。私たちが悲しんだままでいるのではなく、喜びを取り戻してゆくために。

ペンテコステの出来事で、弟子たち一人ひとりの上に《炎のような舌》がともされました。この《舌》という語は、原文のギリシャ語では、《言葉》という意味ももっている語であるそうです。言い換えれば「炎のような言葉」です。この「炎のような言葉」が、断絶されていた人々と、再び出会う道を切り開いてくださいました。

聖霊が与えてくださるこの「炎のような言葉」は、神さまの愛の言葉に他なりません。イエスさまを通して表された、神さまの愛の言葉です。聖霊は私たち一人一人に、この愛の言葉を届けてくださっています。

この神さまの愛の言葉に出会うとき、冷え切っていた私たちの心は再びあたたかくされてゆきます。頑なだった心は再び柔らかにされてゆきます。この神さまの愛の言葉に根ざすとき、私たちの発する言葉は、少しずつ「伝わる言葉」へと変えられてゆくでしょう。

言葉が混乱し、そのことにより対立や断絶が生じている現状にあって、愛に根ざした言葉を発し続けてゆくこと。再び一つに結び合わされることを願って、言葉を発し続けてゆくこと。ペンテコステによって誕生した私たち教会には、この務めが与えられています。このことは私たちだけの力ではなく、聖霊なる主の助けによってこそ、成し遂げられてゆくのだと信じています。

最後に、コロサイの信徒への手紙の一節を引用します。

《これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。　愛は、すべてを完成させるきずなです》（コロサイの信徒への手紙三章14節）

「声」角笛

聖書100週間を修了して思うこと

真栄原教会　宮良安郁

開南教会で全聖書通読を目指す聖書100週間（三年間）が開かれていて、私は二〇一六年二月第五期途中の新約聖書第一回から始め、第六期途中の旧約聖書第八十九回が終了した二〇一九年三月をもって修了しました。とても長かったな、よくぞ続けて来れたな、と言うのが率直な感想であった。

この聖書100週間は旧約聖書二年、新約聖書一年の計三年で全聖書を通読します。旧約聖書は量的に新約聖書の凡そ四倍あります。それで、これを四年ではなく二年で終えるので、新約聖書の場合に比べ、週ごとの量、速さ共に倍になります。

旧約聖書は理解するのに旧約ならではの難しさがあります。それは何と言っても文化・歴史の違いです。沖縄とは全く異なるのです。想像を超える歴史書が多数あり、如何にも旧約と思える表現に満ちています。預言書はそれぞれの預言者が独特の思想を展開しますが、これら歴史書を踏まえて書かれているのです。

ですから元となった歴史書を知らずして預言書の理解はあり得ません。それぞれの預言者がいつ、どのような時代背景の下で活躍したかを理解する必要があるのです。詩編、箴言などの教訓書にも同じことが言えます。ここでは更に求められる視点に風土、地形、気候、植生などがあります。聖書はこれらを総動員しないと理解は望めない文書ばかりから成っていて、注解書・解説書などなしでは到底理解は難しいものばかりでした。

聖書通読は聖書を理解したいと望む、並々ならない情熱と体力（健康）がないと実現できません。もし一人で通読しようとすると、余りにもの量の多さ、加えて難解さにどうしても頓挫してしまいます。皆が同じテキストとカリキュラムの下（もと）で助け合い、励まし合いながら参加し続けることでやっと実現できるものであることを体験しました。

聖書100週間で使う聖書は新共同訳聖書です。これは従来からのカトリックの聖書である「バルバロ訳聖書」「フランシスコ会訳聖書」に比べると、新約聖書は27書で同じですが、旧約聖書はカトリック聖書の46書に比べ、カトリック第二正典が3書、カトリック外典が3書加わり計52書に増えています。

カリキュラムには「エステル記（ギリシア語）」、「エズラ記（ギリシア語）」、「エズラ記（ラテン語）」、「マナセの祈り」が載っていないことが判明したのでこれを含めました。それから、「歴代誌」「マカバイ記」「シラ書」「詩編」の各書は「その中から適当に選択する」になっていたのでこれも全部含めました。なぜなら聖書100週間は「聖書全通読」を謳い文句にしていながら実はそうではないとなると、いかがなものかと思い、話し合った結果、「回数を増やしてでも文字通り全聖書通読を目指す」ことにしたのでした。その結果、旧約聖書はテキストカリキュラムより十三回（約三か月相当）増えました。

全聖書通読して思うことは、旧約聖書を文字通り全て読んだのはとても意義深く嬉しく思いました。私は五歳で洗礼を受け今は前期高齢者ですが、これまでその経験が無かったのです。聖書100週間のお陰です。

旧約聖書・新約聖書共に言えることですが、どこに何が書いてあるかが凡そ分かりました。これからの残された私の人生で出会うことになるであろう聖書のフレーズに対し、この聖書100週間で学んだ経験が必ずや役に立つ筈だと思います。

さて、おこがましいですが、私が聖書100週間で学んだ成果をどのように活かしているかをご紹介します。

私は聖書100週間で決められたカリキュラムの聖書箇所を注解書などの参考書でできる限り学んで、感想を述べることにしました。新共同訳で分かり難（にく）い箇所はフランシスコ会訳聖書ではどうなっているか。英語訳ではどうなっているか、カトリック英語訳NEW AMERICAN BIBLE、プロテスタントの英語訳GOOD NEWS BIBLEではどうなっているかなどと比較検討しました。

そこで学んだのは、各言語の各種聖書はそれぞれ一長一短があると言うことです。和訳での悩みが英訳ですんなりすっきり解決した体験をいっぱいしました。ですから迷った時には別訳も参考にしながら総合的に判断することを学びました。聖書は何を言おうとしているかを学び取るのです。「聖書読みの聖書知らず」に陥らないように常に意識して参加しました。

聖書そのものは原語であるヘブライ（アラム）語、ギリシア語は同じなので各国語に翻訳されても原則として大きな差異は出ない。だから聖書は各国で各教派が一致できる筈だと共同訳の推進が第二バチカン公会議以降、エキュメニカル（キリスト教一致）運動の一環として出てきたのです。新共同訳聖書は日本におけるその成果です。

でも解釈はそれぞれの宗派によって異なります。私はカトリック教徒ですからカトリック教会が教える解釈に従うことになります。基本姿勢はそうですが、プロテスタントの聖書学者、神学者の質の高さ、素晴らしさに触れ感銘を受けました。エキュメニカル運動の成果から生まれた共同訳、そこで共同訳注解書を担当したカトリックの学者たちと共に、プロテスタントの学者たちがおり、彼らの解説が素晴らしいのです。カトリックの中では気づかない視点で解説してくれていることに「神の恵み」を感じ取った次第です。

聖書100週間は毎週一回開かれるのでその準備期間は七日間となります。私は最初の三日間を対象となる聖書箇所をパソコンに全て一字一句違（たが）わずに入力することに当て、残

る三日余で学習し感想をまとめました。ですから振り返って見るととても多忙な三年余でした。

毎日が聖書に明け、聖書に暮れる生活でした。でも、そのことが後の私の信仰生活に大いに役立っています。

それはカテキズム学習でテキストは「カトリック教会のカテキズム（公教要理）」を使いますが、それはカトリック教会の「聖なる伝承」（初代教会からの伝承、教皇の回勅・教令や公会議の決議などの教会の教え、諸聖人の教えなど）と何よりも「聖書」が基礎になっていて、カテキズムで出会う聖書の各フレーズの確認が欠かせません。

私は日曜日ミサに与る前の晩に翌朝ミサで朗読される第一朗読（旧約聖書）、第二朗読（使徒書）、福音朗読のそれぞれの箇所を聖書100週間で自分が入力したパソコン記録に目を通しています。わたしの記録は聖書の必要箇所に注記を加え、感想を加え、英文を併記するなどしていて、学んだ当時を思い出しながら復習するのです。そうすると、ミサ当日の聖書朗読内容が良く分かります。何が何に譬えられているか、何を言おうとしているか、他の聖書のどの部分の影響を受けて書かれているか、依然として分からない箇所はこだな・・などです。

主日ミサから帰った後、自宅ですることにミサで使用し持ち帰った「聖書と典礼」から学ぶ楽しい作業があります。聖書朗読の脚注を聖書100週間で入力記録した私のパソコンに追入力します。時々思いもよらなかったことが書かれている場合があります。そうすることで私の聖書100週間の記録である聖書記録はアップデート（更新）されるのです。

主日ミサで聖堂の席に着き、「聖書と典礼」の冊子を手にして今日はどう言う日かを確認した後、まず目につくのは「表紙絵」です。描かれているのは何だろう、きっと今日の聖書朗読と関連があるのだろう、だとすればどの聖書場面かな・・、この「聖書と典礼」パンフは1961年に始まったもので、当初から「表紙絵」があったか記憶は定かでないですが、こんなにも表紙を飾る絵画、彫像などが次から次へと事欠くことなく載るさまに宗教美術の豊かさを感じとります。

この「表紙絵」をじっと眺めていると作者はどういう思いでこれを描いたのだろうか、どういう背景・経緯があってこの作品が生まれたのだろう、作者はどんな人物か、作成を依頼した人はどんな人か、この作品はどこにあるかなど色々と思いは巡ります。私と「聖書と典礼の『絵表紙』」との関わりは、これまでずっとこの程度で終わっていました・・・。

それが最近「聖書と典礼」発行所のオリエンス宗教研究所のホームページを検索していたところ「表紙絵解説」があることに気づきました。

当該美術作品に造詣があり、聖書にも通じている方が解説していて、その内容は簡潔で目を見張るものがあります。当日の「聖書と典礼の表紙絵」に使われた理由が解説されています。宗教にかかる絵画、彫像、音楽など芸術作品は聖書をモチーフにつくられています。どのような時代背景の下（もと）でこの美術品の作者、作成依頼者がどんな思いでこれに関わったかを知ることは広い意味で文化の理解につながり、関連する聖書の理解につながります。

この「『聖書と典礼絵表紙』を通しての聖書理解と言う新しい聖書学習方法」は、私にとって聖書を芸術の視点から捉えた聖書理解に導くものとして受け止めています。ですから、わたしは日曜ミサから帰った後、我が家での過ごしは食事を済ませ、インターネットでオリエンス宗教研究所の「聖書と典礼の表紙絵解説」を検索し、クラシック音楽のFM放送やCDを聞きながら、コーヒーを飲みながらこの「表紙絵解説」を読み、「表紙絵」を美術作品としてゆったりとした気分で鑑賞しています。至福なひと時です。

聖書を知らずして世界の歴史はもとより、文学、絵画、彫刻、音楽、演劇など芸術、宗教、風俗、それらを含む人間生活全般の理解は得られません。私たちはカトリック教徒としてカテキズムを学ぶと共に、その土台を成す聖書を学ぶ必要があるのです。

主の平和。

教区NEWS教会

石垣教会ニュース

①「教区の日」に婚姻五〇周年の金婚祝いをいただいて

「教区の日」に金婚祝いのメンバーとして、お認めいただき、小禄教会、読谷教会、平良教会のご夫婦様方と祝福と記念品をいただきました。

心から感謝申し上げます。両手でいただきました記念品と共に、目に見えない霊的なものの重さに気付きました。信仰のお恵みあってのこの場「教会のほかに救いなし」と改めて感動と感謝をかみしめております。

「教区の日」は、歴史を振り返る日。「石垣教会」は今年六十七周年を迎えます。私は二〇歳の頃に、石垣教会第四代主任司祭のペトロ・ヴォン・エッセン神父様（カプチン会）より洗礼を受けました。公教要理は、神父様、シスター漢那孝子、有馬伝道師からゆっくり時間をかけて関わっていただきました。教会が、創立十周年を迎えた時に第一回信徒総会が開かれました。八重山の殉教者石垣永将の子孫「嘉善姓」の方々がリーダーとして活躍していた時代でした。

一九六三年に新川地区の布教所が落成、海星幼児園の新川分校が開園されました。私たち夫婦は管理人として住み、この時期を過ごしました。また、第八代主任司祭の稲国神父様の時から、第十三代信徒会長を務めさせていただきました。その後、岡神父様、金城神父様までの十三年間使徒使徒職として、内面の充実を図りながら、役割を果たせたのか、振り返り、また、夫婦としての信仰生活を思い起こしました。

今回、お祝いのお恵みをいただけたこと、感謝の典礼でパンとぶどう酒を奉納させて頂けたこと、祝賀会で、八重山民謡「鷲の鳥節」を夫婦で舞えたこと、子供たちも一緒に参加できたこと、教区報に取り上げられたこと、私たちの参加に向けてマイケル神父様が力強く勧めてくださったこと、本当に嬉しく思いました。

今後は、司教様が、石垣教会に来られた時のお説教の言葉で、「恵みは、恵みにふさわしい心の準備と行いをした人々の中で実を結びます」をこころの糧として、祈りのうちに務めて参りたいと思います。

ガブリエル　石垣吉民
エリザベット　幸子

②ペトロ神父様来訪

二〇二〇年一月二六日、年間第三主日に、ペトロ神父様が石垣教会を訪問なさいました。御ミサは、マイケル神父様と共同司式で捧げられ、引き続きお説教をいただきました。ペトロ神父様は、教会創立期の主任司祭であり、洗礼を受けた者も多く、自然体でお話しを傾聴しました。

語りかけられるフレーズが、聞き手の心に問いかける。受けとめて祈り、回心へと導いてくださるので、特に高齢の信者は「回心のために神様の導きを願いながらゆっくりと黙想の展開ができるので楽であった」と感謝していました。祈りの大切さは共に捧げる祈り、特に祈りの分かち合いが大切です。神様が常に自分に働きかけてくださっていることに気づく。

重く暗い心の状態に陥るのは、祈りによって救いは得られる。自然な信仰態度を深めて行こう。なすべきことはただ一つ。後ろのものを忘れ前のものに全身を向けつつ、神様がイエス・キリストによって上へ召してお与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすらに走ることです。

神様の祝福が頂けた将来の石垣教会が、さらに明るいものとなるでしょうと、ゆるしの秘跡の後は、全員がすむまで御堂に座り、祈りを続け、共同体は連帯して回心に励むことができました。

（河口儀子通信員）

＊＊＊＊＊＊**お知らせ**＊＊＊＊＊＊

2020年5月10日(日)に予定していた名護教会創立60周年・献堂５周年記念感謝ミサは、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、日程を延期することにしました。新しい日程はおって連絡いたします。

主任司祭　ボスコ･ティン神父
信徒代表　比　嘉　是　勝

訃　報

✝主の平和

那覇教区長ウェイン・フランシス・バーント司教様のご慈母 Simone Velma Berndt様は、4月27日(現地26日夕方)故郷のマサチューセッツ州にて帰天されました。享年95歳。愛するご子息を宣教師として遠い沖縄に送り、その修道司祭としての働きを支え、素晴らしい司教となるほどに多くの祈りと犠牲を捧げてきた故人のために祈り、哀悼の意をこめて各司祭で追悼ミサをお捧げくださるようお願いします。

なお、新型コロナウイルス感染拡大防止対策中につき、くれぐれもこれまでの防止策を徹底して三密を避け、注意して追悼ミサを捧げるようお願い致します。また同様の理由で、教区追悼ミサについてはしばらく控えなければいけない状況ですので、後日お知らせいたします。かねてより覚悟していたこととはいえ、母との別離は哀傷をともないます。悲しみのうちにあるアメリカの兄弟姉妹と御遺族の為、また特に飛んで帰りたいのに踏みとどまり、遠く離れていることでより一層恩愛深く感じておられる司教様のために皆様のお祈りをお願いいたします。“父なる神よ、あなたの御国に彼女を迎え、永遠のやすらぎをお与えください。アーメン”

那覇教区司教総代理　クレーバー・ディソーザ

葬祭の「やすらい企画」

私たちは故人とご遺族の意向を最優先に考えます。何でもご相談下さい。

那覇市首里鳥掘町4-57-3
TEL&FAX:098-885-8205
http://w1.nirai.ne.jp/yasurai
E-mail:yasurai@nirai.ne.jp

24時間受付

～ご遺族の心をもって奉仕する～

葬典社（そうてんしゃ）

＊創業30数余年・・・。
＊皆様に支えられ「感謝」とともに人生を閉じるためのお手伝いをさせていただいております。
＊ご質問、ご相談、24時間、いつでもお電話下さい。

「ゆうなの会」会員募集中です。

（実務担当）比嘉（ひが）　高茂（たかしげ）

24時間受付

☎098-853-1059（てんごく）